



幸せ?!

家族計画

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

HUTA
H
ふたなり注意

幸せ？家族計画



作：節操ナイン
画：築

ふたなりゆりちゃんともこっちの幸せ？家族計画

節操ナイン

寝起きは、いつも気だるい。黒木智子は昔から朝に強いほうではなかったけど、年齢を重ねるごとにその傾向が強くなってきた。

(いや、歳とってほど老けたつもりもないけどな)

自分で自分に突っ込みを入れつつ、ぼけた意識のまま、ベッド脇に置いてあった目覚まし時計を確認する。目覚まし機能を設定されず本来の役目を果たせなかったそれは、短針と長針がお互いにほぼ真上を向いていた。

「……朝ってか、もう昼じゃねーか」

平坦な独り言と共にようやく思考のヒントが合わさってきて、現状を認識する。

まず今は朝ではなく昼。ただし休日なので、遅刻どころの騒ぎじゃねー！と焦る必要もない。智子といえど、大学を卒業し就職した今では、時間管理くらいはきっちりするようになっていた。もつともその分、休みの日はこの有様だけだ。

「……ん、智子。どうしたの……？」

と、智子以上にぼんやりした声と共に、隣の布団がもぞもぞ動く。

そこでようやく、寝坊助は自分だけじゃなかったことに気づいた。

「やっと起きたか、ゆり。もう昼だぞ」

「……それだけ？」

「いやお前、それだけって」

そこそこ長い付き合いであり、今は同居人でもある田村ゆり。同じ家に住み、同じベッドで寝る仲の彼女の言葉に、智子は呆れる。せっかくの休みの日を既に半分以上無駄にしているのに、ゆりはまるで頓着していなかった。無理に外出せずとも家でゴロゴロしたいのは智子も同じだったけど、むしろ自分たちは無理にでも外出しないと本当に外に出ないという自覚を感じるこの頃。

「休みなんだから、こんな時間だけどっか行くか？ 真子さんも誘ってさ」

未だポツとした表情の、現実に戻りきれないゆりに提案してみる。智子の友だちであり、ゆりの親友である田中真子の名前を使えば、彼女も外出する気になると期待して。

「こないだテレビで見たスイーツの店でも行くか？ それか映画にでもッー??」

ゆりが少しでも興味を持ちそうなプランを挙げていた矢先、突如走った甘い痺れに智子の声は強制的に止められた。

くちゅ、くちゅり。小さな粘っこい音が連続して智子の耳に届く。その音の発生源は、他でもない智子自身から。

布団代わりのタオルケットに隠れた、すっ裸の智子の姿、その股間に、同じく全裸のゆりの右手が伸びていた。昨夜さんざんいじめられた陰部を、数時間ぶりにまさぐられる。ゆりの細い人差し指が、情事



で濡れたままの膣内を擦り付ける。指の侵入と共に、膣内を満たしていた色々な液体が膣口から漏れ出ていく感触に、智子は震える。

「おっ、前、んんっ!♡」

「どこにも行きたくない」

いつの間にも目覚めたのか、ぼんやりではなくマジなトーンでゆりが語り掛けてくる。指の動きの力強さとしなやかさは、覚醒してない意識でできるものではない。

寝る前にさんざん、気絶するほどしたにも関わらず、ゆりの責めに肢体が悦んでしまうのを感じる。気持ちいい、ただそれだけの感情に意識が塗り潰されそうになっていく。

「せっかくの休みなんだから、いっぱいしよう」

くちゅくちゅと小さかった粘液音は、今やぐちゅぐちゅと部屋に響くほど大きくなっている。新しく分泌された愛液が、ゆりの指と智子の陰部をべったり濡らす。

ヤバイ。このままでは流されてしまう。思惑通りにされるのが何だか癪だった智子、ゆりの右手を取って責めを強引にやめさせる。

「せっかくって、毎日、やってるだろうが……!♡」

快感の余韻で絶え絶えな声を、それでも精一杯に張り上げて抗議する。

セックスは嫌いじゃない。むしろ好きだ。ゆりとするのは気持ちいいし、心も満たされる。けどだからといって、セックスししかない、寝ても覚めてもセックスな生活は不健康というか、不健全というか。一

応はまだ二十代前半の、若いといえる女の子(?)。たど世間一般からいえばノーマルではない恋愛事情とはいえ、やることまでアプノーマルである必要は無いと思う。

「たまにはセックスじゃなくて、他になんかっ!♡ いや待」

「今日は、一日中しよう」

ただそんな願いも空しく、押さえる智子の手を物ともせずにゆりの愛撫が再開される。そもそも腕力差からして、本気になったゆりを智子が止めることなどできない。そうしないのはゆりの優しさゆえで、このようにゆりが優しくもない時はもうどうしようもない。

「……こないだの休みの時も、けっきょく一日やってただけだった。最近やるだけの猿みたくなってるぞ」

「別にそれでいいよ」

せめてもの抵抗として皮肉を飛ばすが、それすらも今のゆりには通用しなかった。開き直っているのか、ちょっと前にあれだけやったのにもう性欲漲っているのか。膣内への侵入を再開したゆりの指、途中の膣壁を優しく引っ掻きつつ、ゆっくり侵入してくるそれに、智子の性感もいやが上にも高められていく。息があがり、目が潤む。ゆりに自分の体のすべてを預けたい、そんな欲求が沸いてくる。そして指先の先端が智子の最奥に届く、その直前に。

「あっ♡ ふ、ふえ……?」

ゆりの指の動きが止まった。そして口元を智子の耳に寄せ、囁いてくる。



再び、突如としてゆりの責めが止まり、そして智子の右手に大きくて熱いモノが握られる。布団で隠れていて見えませんが、昨晩に智子さんをさんイカせまくってくれたモノなのは間違いない。

女性に生えた男性器。いわゆるふたなり。ゆりと智子がかこまでの仲に発展した原因でもあった。ゆりに秘めた想いと共に告白された時が、もう遠い昔のように思える。そのくらいには長い付き合いとなった、大きく、グロテスクで、けど愛しい恋人の分身。びくびくと激しく脈動していて、今にも白濁液をぶちまけそうな勢いだった。けど多分、ゆりもこのまま暴発したいとは思ってない。

「智子の中で、出したい」

「……わ、私も、どうせならそっちで、いきたい、かも」

やはり二人とも同じ考えだった。これまでに肌を重ねてきた経験からすれば、むしろ当然なのかもしれないけど。智子はゆりの陰茎で絶頂したいし、ゆりは智子の膣内に射精したい。

互いの利害関係が一致し、ゆりが寝転んだままの智子に覆い被さってきて、その男性器を智子の膣にあてがう。そのまま挿入、される前に智子はその右手を、指を若干開いてゆりの目の前に突き出した。

ゆりもすぐに察し、左手で智子の右手を掴む。指の一本一本が絡み

合い、恋人繋ぎになるように。決してセックスだけの仲じゃないと証明するかのよう。そして一気に腰を押し進められる。

「んん、んーっ！っ！っ！っ！」

「あっ♡ きっ、つい……♡」

ぬるぬるに濡れそぼった膣は、ゆりの陰茎をにゅるんとあっさりとかみ込む。しかし内部はぎちぎちなくらいに狭く、陰茎を締め上げる。己の膣内が強い圧迫感と共に、ゆりの陰茎でいっぱいになるこの感覚。さすがに痛みまでは感じなくなったものの、挿入時の衝撃は依然として大きい。反射的に腰が引けそうになったけど、ゆりが陰茎にあてがっていたもう片方の手も恋人繋ぎにしてくれたおかげで、何とか堪える。

何度も、何百回も受け入れてきたにも関わらず、智子の膣はゆりの大きな分身に馴染み切っていなかった。秘肉というだけあって肉なのだから、これだけヤリまくればゆりのサイズの合わせて、イヤな言い方をすればガバガバになってもう少し楽に受け入れられてもおかしくないはずなのだけど。それだけゆりの男性器が大きく、その反面小柄な智子は膣の大きさもそれなりでしかない、ということ。

「くっ、うう……♡」

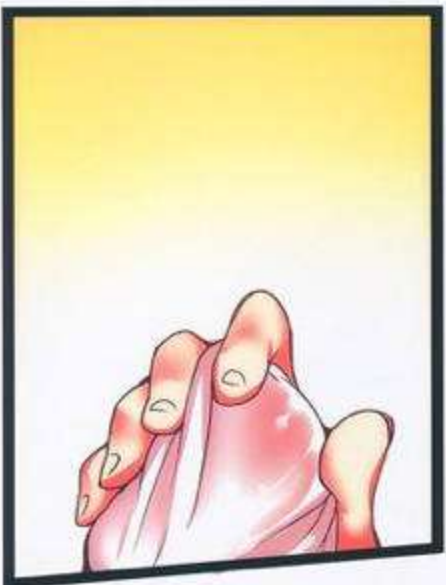
見れば、ゆりも我慢してるような表情だった。いくら狭きつといはいえ、挿入してすぐに射精ではブライドが傷つくのか。

少しの間、挿入したままの姿勢で過ごす。やがて快楽の波が多少引いたらしいゆりが、ゆっくりと腰の前後運動を開始する。

「ふう、智子の中、熱くて、気持ちいいよ……♡」

「あっ、あっ、あ、あーっ♡」

ばんっ、ばんっ、ばんっ！





小さく狭い膣内にも関わらず、多量の愛液で抽送はスムーズだった。とろとろに溶けた蜜壺は灼けるように熱く、陰茎を粘液とともにしゃぶり回す。腰を進められると、智子の小さな膣の最奥まであっさり通り返り、子宮口が鈴口に吸い付く。腰を引かれると、名残惜しように膣内全体が返しのようになって陰茎が抜けるのを妨げようとし、それが更にゆりに快感を与えた。

「きっ、もちいい……♡」

息を荒げながら、ゆりに頬を舐め上げられる。舌は頬から唇へと移り、口内にまで侵入してくる。そういやこれが目覚めて最初のキスだな、と智子はぼんやり気づいた。

口内ではゆりの舌が智子を蹂躪し、膣内ではゆりの陰茎がやはり智子を責めまくる。ディープキスのおかげで息苦しくなってきたのも相まって、絶頂の波がどんどん近づいてくる。

「ううーっ♡ ふーうーっ♡ いぐ、いぐっ♡ いぐううっ！

♡♡

「わ、たしも、もう、イクっ……！！♡ 出るっ！！♡」
「びゅっ！ びゅる、びゅくっっ！！」

最後にばん！と大きく腰を打ち付けられ、同時に熱い奔流が膣内へ流し込まれるのを感じる。同時にぎゅっ、と恋人緊ぎにしてた両手を思い切り握りしめられる。数時間前に何度も出したにも関わらず、精は智子の膣内に収まりきらず、膣口の端から漏れ出てくるほどの量だ

った。びくびく、と長い射精に震えるゆりの軀を、智子は優しく抱きしめた。

絶頂が過ぎ、ぐったりと脱力しながら余韻に浸る。ゆりもようやく、全部を智子に注ぎ込んだらしく、はあはあと息を乱しながら智子の軀に全体重をかけてきていた。ぶっちゃけ重いのだが、智子はこの重さが嫌いじゃなかった。セックスの際は智子を気遣い、覆い被さりながらもあまり体重をかけてこないよう気を遣う余裕もないらしい。それが何となく、自分の軀で思いつき気持ちよくなってくれた証左のようで、嬉しいのだった。

「……なんか今回、早かったな」

「……寝起きで、あんまり我慢できなかったから」

自分だって共に果てたのに、自身を欄に上げた智子の発言に、ゆりが不服そうに口を尖らせる。射精直後の陰茎は半萎えて、智子の膣内で力を失いつつあった。

「もうお疲れか？」

煽るように言ってみると、さらにムッとした表情に変わるゆり。返事の代わりに、智子の控え目な胸に吸い付いてきた。

「あ、ちよい待ち、まだ敏感だから、あっ♡」

「む、んちゅ、べろ」

びちゃびちゃと、わざと賑らしい音を立てながら乳首を舐め、転がされる。絶頂後の軀は刺激に敏感で、胸に舌が這う感触に背すじがぶるりと震えた。

(こいつ、おっぱい舐めるの好きだな。母性とか求めているのか?)

くすぐったさと快感に酔いしれながら、頭のどこか冷静な部分が眩く。思えばゆりと初めて会った頃は、こいつのほうがお姉さんぶつたような記憶があるのに。今では自分のほうがゆりの抑え役というか、面倒を見る機会も増えていた。こうして熱心に乳首をしゃぶる光景を見ると、つとにそんな感情が強くなってくる。

「おっぱいおいしい?」

さらに煽り立てるような言葉を投げつけつつ、ゆりの後頭部を抱いてよしよしと撫でる。まるで赤ん坊同然の扱いに、ゆりの責め立てが一層強くなる。

「じゅる、じゅるじゅるっ! ちゅちゅっ!」

「あっ♡、ふーう♡、乱暴なっ、赤ちゃんだなぁ♡!」

思い切り乳首を吸われ、軽く歯を立てられる。達したばかりなのにまた絶頂へと昇り始める感覚、そして膣内の陰茎も硬さを取り戻していく感触。

ふは、とようやくゆりが口を離すころには、智子は呼吸をせいでいとし、ゆりの陰茎も先ほどと同じくがちがちに力強くなっていた。

「……疲れてないよ」

ようやく先ほどの質問の答えを返して来る。と一緒に、ずん、と思いい切り腰を突き上げてきた。

「あっひいっ!♡」

予期せぬ悦楽に、不意を打たれた智子の口から間抜けな音が出る。たぶん顔も変な風に至んだ。その自覚がある。

「智子……ともこの賑らしい顔、可愛い」

それなのにゆりは、そんな智子を可愛いとか言ってくる。ふだん滅多にそんなこと言ってくれないのに。ベッドの上でなら甘い言葉を囁いてくれるゆりは、本当にタチが悪いというか。

「……変態なこと言っでんじゃねーよ」

恥ずかしさやら反発心やらをない交ぜに、両腕をクロスして己の顔を隠す。ゆりがセックスの際、正常位だったり正面座位だったり、智子と顔を合わせてするのが好きなのはよく知っている。だからこそその嫌がらせ。

「隠さないで。よく見せて」

けどそんな嫌がらせが通用するはずもなく、クロスした両腕をゆりの両手で掴まれ、強引に外側へと追いやられる、繰り返しになるが、腕力差で言って智子はゆりに絶対に敵わないのだった。ゆりとはっちら目が合い、未だ表情が崩れたままの自覚がある智子は快感以外の理由で顔を赤くした。

「っこの、へんた、イッ!?♡」





ぐい、と腰と背中を持ち上げられる感触。そのまま勢いよく起き上がり、勢いそのままに正面へと倒れ込む。つまり、ゆりの牝の真上に。先ほどまで正常位だったのが、今度は逆に智子がゆりに覆いかぶさる体位へ。そして容赦なく、ゆりが腰を突き上げてくる。

「うぐうっ!?♡」

ずしん、と重い膣への衝撃に、さっきと同じように反射的に智子の牝が逃げようと大きく跳ねる。それを逃さないかのように、今度は手でなくゆりの両腕ががっしりと智子の背中に回された。力強く背を抱かれ、智子は快楽から逃れられない。

「..あっ!♡ ひっ!♡ ん、ぐうっ!♡」
ばんばんばんばんばんっ!!

色んな液体で濡れ湿った結合部から、淫靡な音が響く。ゆりの巨根が智子の膣奥を穿つたびに、智子の牝が震え跳ねる。逃れたくても逃れられない快感に智子はどうすることもできず、ただ涙を流しながら嘔ぐしかなかった。

「智子の胸も、小さくて、可愛い」

「それっ♡ ほめて、ないだろっ!♡」

おまけに丁度ゆりの目の前にきていた乳首を思う存分に舐めまわされる。膣と胸、二つの敏感な性感帯を激しく刺激され、智子の性感は一気に絶頂へと昇りつめていく。

「..あっ♡ ヤバっ♡ いくっ♡ もういくっ!.. いくうううっ!♡♡♡」

びく、びくん、と数度大きく体が震え、そしてくったりと脱力する。あまりの責めの激しさに、たやすく智子は果ててしまったのだ。

「智子、自分だけ勝手にいっちゃったの……?」

そして体の下から聞こえてくる、底冷えのするような声。ジト目になったゆりが智子を見上げていた。別に約束してたわけじゃなかったけど、果てる時はお互い一緒に、というのが暗黙の了解になっていた二人。智子だけ先に絶頂してしまったということは、つまり。

「いやこれはお前がやり過ぎたから」

「言い訳しないで」

無情に言い放たれ、絶頂したばかりの膣を再び剛直で刺し貫かれる。まるで休ませるつもりのない、激しいストローク。敏感なままの性器に、暴力的なほどに陰茎を叩きつけられる。

「..あ..あっ!♡♡♡」

意識がぐらくらくと揺れる。喉から引き絞られたような悲鳴が漏れる。涙と唾液が零れるのを、止められない。

「智子、すっごく、きれい……」

熱っぽい、うわ言のようなゆりの声。ゆりが滅多に言ってくれない、「かわいい」ではなく「きれい」という言葉。それも今の智子には響かないというか、脳が理解できない。ただ本能で快楽を受け止めるのに必死だった。

「気持ちいいッ!♡ きもちいいっ!♡♡♡」

膣痙攣を起こしたかと錯覚するほどに、思い切り膣内が縮まっていくのが分かる。締め付けられる側のゆりの表情も、若干の痛みを感じているかのように歪んでいる。それでも腰の動きを止めず、むしろ更に激しく突き上げてくる。ほとんど間を置かず、またびの絶頂へと登り始める感覚。しかしそれが、頂上へと到達するより前に。

「あ、で、でるっ!」

びゅるびゅるっ!ー! びゅびゅーっ!ー!

短いゆりの声と一緒に、膣内にまたも感じる熱いものを叩きつけられる感触。胎内に吐き出された今日二回目の精液に、智子は打ち震えながらも満足だった。

しばらく後にゆりの射精の痙攣が収まる。一度目とそう変わらない量の精液は、智子の膣内にまるで納まりきらず二人の結合部や腹部、脚を汚していた。

「……お前、先にイったな?」

「それは智子でしょ」

今度は智子が責めてみるも、先に一人で絶頂したのも智子だったからまるで説得力が無い。ただそれでも、中途半端に快感が煽ぶつているのは間違いなくて。

「まだやれるよな?」

それは質問ではなく確認。ふたなりの性欲は一般男性より遙かに強く、ゆりも一度や二度の射精で満足できることは滅多にない。それを知ってるからこそだったが、それにしただって中休みは必要でもある。

「……まだできるけど、ちょっと休もう」

ゆりも多少の疲れを感じていたらしく、陰茎を膣内から引き抜いた。ごぼり、と音がして膣内を満たしていた精液が一気に溢れ出てくる。膣口から尻を通り、ベッドを汚すその光景は淫猥そのものだった。

ふう、と軽く息を吐いてベッドに腰掛けるゆり。射精した側はそれで満足かもしれないけど、体内の炎が微妙に燃え盛っている智子には、勝手に休み始めるゆりは許せるものではなかった。

「疲れたんだよな? だったら、元気にしてやるよ」

そう言ってベッドの上を機敏に這いずり、ゆりの股間に顔を埋める。そして精液やら愛液やらでべとべとに汚れた陰茎を、ぱくりと口内に含んだ。


「……やらしいね、智子」

冷静に言い放つゆりを、智子はあえて無視する。ちゅ、ちゅっと軽く吸って尿道に残った精液を吸いだし、飲み下す。ゆりの巨根はどうも智子の小さな口に収まりきるものじゃないから、口に含むだけでなく舌で舐め上げ、もちろんとねぶり回して汚れを落とすとしていく。

「む、ちゅ、ぶはっ♡ れろ、れろお♡」

ちっちゃな智子が、一生懸命に口と舌を使って、精液を舐めとり綺麗にしていく。ゆりの陰茎がどんとん力を取り戻していくのを感じる。





汚れを落とし終えた智子が見上げると、そこにはやっぱり無表情の、けれど淫欲に目を融かし切ったゆりの顔があった。

「……ありがと。お礼に、いっぱいしてあげる」

いつになく真剣なトーン。これはまた、気を失うまでやらぬ続けるのだろう。僅かな恐怖とたくさんの期待に、智子の眸はぞくぞくと震えるのだった。

その後二人は、ひたすらまぐわい続けた。食事も即席でできるものをベッドの上で食べ、そしてすぐに行為を再開した。流石にどちらかが催した際には、お手洗いまで一緒なんてことまではしなかったけれど。

ど。それ以外では、外出もせず、シャワーも浴びず、ただセックスを続けた。

何度射精したか、何度絶頂させたか。ゆりですらよく分からなくなってきた頃には、窓の外は既に真っ暗だった。

「……はあ、はあ、はーっ」


隣では小刻みに呼吸を乱した智子が、ぐったりベッドに横たわっている。意識さえなにか保ってるものの、一日中してたおかげで精根ともに尽き果てたのだろう。そう思うゆりの陰茎も、もはや完全に萎え切り、当分復活できそうにない。

何となく視線を動かすと、ベッド脇の目覚まし時計が目に入った。し始めたのは時計の短針と長針がほぼ真上だった時。そして今も、短針と長針がほぼ真上にあった。つまり半日やり通しだったということになる。

「……そんなにしてんだ」

我ながら呆れるように吹き、時計を手取る。今日は休日で役目を果たさなかった目覚ましだけど、明日は役に立ってもらわなければならない。目覚まし機能をセットし、所定位置に戻して、再びゆりは隣の智子の姿を眺める。

少しだけ呼吸の起伏が収まってきた智子。その姿は初めて会った時と同じく、小さい。自分も同じで、あの時とあんまり変わらず、無表情で愛想のないまま。



「……明日、か」

明日は仕事。それは智子も同じ。だから今日はもう、シャワーで眸の汚れを落とし寝なければ。汚れまくったベッドの後始末や、片づけてない食事の跡など、今からやっつけられる余裕すらない。

「智子。シャワー浴びよ？」

未だに体が力が入らないした智子を引き起こし、肩を貸して浴室へと運んでいく。寝室も廊下もあまり掃除が行き届いておらず、浴室もとまではいかなくてもしつかり者の真子あたりが見れば小言が飛び交ってくるに相違ない有様。

けどそれも、仕方ないとゆりは思っている。二人とも平日は仕事でくたくたで、とても掃除やらをやる余裕はない。性豪の自覚ある両者ですらセックスできない日もあるくらいなのだから。たまの休日も、こうして特に家事などはせずに終わっていく。

はたから見れば、ダメ人間でしかない生活態度だろう。黄金以上の価値を感じない勤務態度も、社会人としては褒められたものではないかもしれない。

ただそれでも、ゆりは今に満足していた。

仕事に思うところが無いわけじゃない。減多に外出しない日々にも、高校以来まるで広くならなかった交友関係にも、考えないわけじゃない。特に趣味も無いし、家族と会う機会も減ったし、世間の情事にも疎いため社会人でありながら若干浮世離れしている。

けれどそれでも、ゆりはこれで良かった。自分の隣に智子がいてくれれば、そして偶に、真子や菜咲、ちよっと気に入らないところもあるけど陽菜や明日香と気晴らしを楽しめれば。

ゆりはそれだけで満足だった。

自分の家に、自分の隣に、自分のベッドに智子がいてくれれば。一緒にいられば、智子が自分から離れなければ。

一緒に過ごし、一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入り。

一緒にのベッドに寝て、キスをして、胸を味わい、柔肌を抱きしめ、膝内に射精できれば。

ゆりは他に何もいらなかった。智子との子どもさえ、特別欲しいとは思わない。

ただ今の、何もなくても幸福な日々を続けることができれば。何者にも邪魔されなければ。裕福でなくても、生活に支障が無ければ。自分たちの小さな世界を、自分たち以外に知る人がいなくても。ゆりはそれだけで、満足だった。



「……まあ、できるだけな」



「ずっと一緒にいようね、智子」



あとがき

初めまして、第壱ユタカ荘の築と言います。
いつもは「入稿〇時間前にこれ書いてます。」
ネタでなんとか乗り切っているのですが
今回は良い子ちゃんなので使えません。
詰んだ。ちんぽちんぽ！

今回はわたもてふたなりSS界
の巨匠節操ナインさんに
素晴らしいふたなりSSを提供
して頂き、このような形式の
本になりましたが、いかがでし
たでしょうか？

作中のゆりちゃんはおこちとの
子供も特別欲しいと思わないと語って
いましたが、この絵はそれに対する自
分なりのアンサーとして描いてみました。

作中のゆりちゃんには少し不満かもです
がこういう幸せの形も一つのエンディング
として有りなんじゃないかなと。

嘘です。本当は妊婦もおこち
が描きたかっただけです。
ボテ腹最高や！孕めばきっと
乳も成長するやで！！



